

→十三峠を越えて、在原業平が歩いた道筋で

2020.8.9 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 558 回参加報告

「風吹けば沖つ白浪龍田山夜半にや君がひとり越ゆらむ」(『伊勢物語』第 23 段)

天理の妻が、詠んだとされる歌である。業平が、河内に出かけた振りをして妻を見ていると、彼女がきれいに化粧をして、悲しそうに外を眺めながらこの歌を詠っていたらしい。「風が吹くと沖の白波が立つという龍田山を、今夜もあなたは一人で越えて行くのでしょうか」せつない妻の女心を聞いて、河内の女が手ずからご飯をよそうのを見て行儀の悪さに興ざめしていた業平は、心を入れ変えたのか、もう河内へは通わなくなってしまった。というところで「伊勢物語・第 23 段」は終わっている。



水呑地藏尊・地藏堂からの眺め

それにしても、業平ぼっちゃん、妻の実家が落ちぶれたので、新しい女性を得られればと河内へ通っていたらしく、いやさ、いただけない男だと、今日のレジュメの冒頭に書かれていた。が、平安時代も現代も、下世話な話だが、財産目当ての婚姻はあるらしい。僕の息子には、そんな男になってほしくはないが、一抹の期待もしているというのも本音か。

さて、十三峠は、奈良県平群町福貴畑と八尾市神立(こうだち)の境にある、生駒山の峠の一つだ。峠のすぐ北側、スカイラインの東側(平群へ寄ったところ)にその名の由来である十三塚があり、室町時代のもので推定されているそうだが、それらしい埋没施設や遺物は発見されていないらしい。その峠から、大阪側に石がごろごろした急坂を下っていくと、神立茶屋跡である。神立は地名で、この辺りに何軒かあった茶屋の一つが、河内女の家だと設定されていて、その説明を刻んだ石碑があった。この道は大坂玉造につながっているらしく、繁く旅人が足を運んだのだろう。

左へ曲がると、玉造部の祖神である玉祖命(たまおやのみこと)を祀る玉祖神社で、長い鳴き声を持つ珍しい黒柏鷄が数羽飼われていた。ここに「業平の笛」が預けられていたという。業平が河内女を訪ねてきたときに合図としてその笛を吹いたらしいが、ある日、吹かずに彼女の家の東の窓を覗いたらしい。それでお行儀の悪さに興ざめしたという。河内では、だから東の窓を開けないのだそうで、笛は、いまは八尾市立歴史民俗資料館に預けられているという。が、館に聞くと「偽物ですよ」と、そっけない。偽物でもよいから見せて！と思うのが人情というものだろうに……。ちょっと、腹が立ち、最後の最後に暑さが沸騰した。



玉祖神社の長鳴鷄

さて、来月 9 月 13 日は、いよいよ業平の自邸、天理の井筒井を訪れるそうだ。

(報告/2020/09/1: 田淵浩一)